



大正哀歌



じゅしん

終焉は確かにそこに

やっぱりと声に出したつもりが、掠れた。彼が小さく首を傾げるので、口の中に溜まる液体を吐き出し、もう一度声に出した。

「やっぱり、リョータは優しい」

その言葉を聞いて遼太郎はわずかに目を睨り、そして薄く笑った。遊女のように妖艶な笑みだ。しかし、僕だけが知っている。それは、嘲笑。

「そうだね、僕は優しい。でも、本当に？」

その言葉と共に僕に深く刺さっていた刀が更に深くなった。柄の先に掌を押し当て、平均よりは軽いであろう体重をのせて深く。僕達が生まれる約三十年も前に廃刀令が出ているのだからこの刀は大方父親の物だろう。僕がそう考えている間にも刀は深く深く刺さっていく。

「…ぐ、あ…」

肺が潰されて声にならない声で呻くと、遼太郎は小さく笑いながら耳元でささやいた。

「これでも僕は優しい？」

遼太郎はこんなに力があつただろうか。僕が凭れ掛っている柱に刀が刺さる音がした。めり、めり、と塗装のはげた大黒柱が悲鳴をあげる。気が狂いそうな痛みが、麻痺し始めていた。

「はは、舞子サンも哀しむだろうねえ…」

無理して笑うなよ、君には似合わない。そうさ、十分に優しい。だって君は、泣きそうじゃないか。座っている状態なのにどうしてそうなるのか、血が口に溜まって喋れない。血を吐き出すことすら、できそうにない。

「……………」

辛そうな遼太郎を見たくなくて、僕は目を閉じた。静かに、自分の死を感じる。

「ジュン？ 淳之介？」

ああ、と思った。

「——…」

リョータ、と呼んだはずの声は出なかった。

——やっぱり、君は優しい。

それは救いの手にも似て

「ジュン、淳之介!!」

息を切らして僕のもとへ走って来る遼太郎。これは、三日前の記憶だ。

「ごめん、リョータ。こんな所に呼び出して」

ああ、そうか。

この日僕は、遼太郎を今はもう神主がない小さな神社に呼び出した。

人々に忘れ去られた小さな神社は、竹藪に囲まれており、僕達の恰好の遊び場だった。来るのは久しぶりだったはずだ。

「ジュンがここに呼び出す時は何か秘密を教えてくれる時なんだ。知ってたかい？」

「…知らなかった」

確かにそうかもしれない。

「でも僕は君が何を言おうとしているのかわかるよ」

目が笑わないまま口許だけで笑う遼太郎に、思わず首を振る。

「違う。それじゃないんだ」

「？」

「僕は結婚なんかしたくないんだ」

僕の言葉に、遼太郎の作ったような笑顔が、一瞬崩れた。

「え？僕は自由恋愛だと聞いていたんだけど——…違うのかい？」

「立派な政略結婚さ。きっと両親は世間で自由恋愛が流行っているから、そういうことにして…。とにかく、佐藤舞子なんて、名前も聞いたことないんだ」

「僕知ってる。いつも君のことを見ているきれいな子だよ」

いつも僕を見ている？

心当たりは、ない。

「それでも僕は結婚する気なんて——…」

「ねえ、僕が助けてあげようか？」

「本当かい!？」

「ああ」

遼太郎は屈託なく笑った。その笑顔は、女顔なもの相まってとても美しかった。

「僕が君を、殺してあげる。どうだい？全てからの解放だ」

純度十割の殺意。

まったく。君は、そればかりだ。

「よろしく頼むよ、リョータ」

その視線は氷のように冷たく

「ジュンと遊ぶの、久しぶりだね」

まあ、遊ぶと言ってもただ話すだけなのだが、そんなことを遼太郎はふてくされるようにしながら言った。

「そうだなあ…」

神社にいる…これは確か、半年前だ。竹林の騒めきが何となく印象的だったので妙に覚えている。

「もうすぐ半年だね」

「何が？」

「書生として秋山家に住み込み出してさ」

ああ、そうか。住み込みで家庭教師をしている秋山家に暇をもらって遼太郎とここに来たのだ。ざわざわと揺れる竹を眺めながら、二人で他愛もない話をした。

「もう半年か…早いなあ」

「たまに街で会っても君は秋山家のお嬢さんのお守りで大変そうだし」

遼太郎は子供のように足をぶらぶらと揺らした。箱入り息子とでも言おうか、甘やかされて育った遼太郎は少し子供っぽいところがあった。

「秋山家の六人もだけど…街の娘は大概君を囲んでいるよね」

「ああ…。五月蠅いよね…」

きゃあきゃあとよく聞き取れない甲高い声で娘たちが話す度、遼太郎の遊女のような笑みを思い出した。

しかし、時々遼太郎の方が幾分おしとやかで美しいと感じることもあり煩わしいばかりだった。

「まったく…。彼女達も報われないね」

「僕には君がいれば十分さ」

「本当？」

「ああ」

遼太郎は嘲笑を見せた。

いつもの、薄く笑うようにする妖艶な笑み。

「僕も君さえいればいい。だけど…、」

遼太郎は目を細めた。

でも、笑ってるわけではない。

冷たい視線が僕に突き刺さる。

「あんまり僕を放っておくと、殺すよ？」

沈黙が流れた。そしてその後、

「嘘だよ」

遼太郎はにこりと笑った。屈託のない笑顔。作り笑いだ。

「…うん…」

わかってる。

それが、嘘。

その予想は未来でもあり

「そういえばジュン、秋山家に行くんだって？」

「ああ、書生の件か…。家庭教師としてあそこの娘達を面倒見なきゃいけないんだ」

「気が重いね、それは」

「勉強ができるならいいさ」

「秋山家は遠いよなあ…。帰ってくるんだらう？」

「たまに、だけどね」

「ふーん…」

カコンという鹿威しの音が訪れた沈黙を破った。

これは秋山家に住み込む前だから一年前…、僕の家だ。

「リョータは、どうするの？」

「僕は…家庭教師が来る側さ」

「…そうだね」

遼太郎の父親は政治家…金持ちだ。わかっていた答えにしては、身分というものは明確にはないはずなのに、差というものをひしひしと感
じてしまう。

「ねえ、ジュン…」

「？」

「帰って来た時は、僕と遊んでね？」

「もちろん」

「それにしても…秋山家は女の子ばかりだったよね…」

「そうなんだよ」

「そっかあ…」

遼太郎は目を伏せた。

そして、眩く。

「死にたくなるほど、つまらなそうだね」

「ははは、何てこと言うんだい、リョータ」

ご名答だよ。

未来は考える必要さえなく

涼しい風に、ざわめく桜の花。

どこかの縁側…ああ、遼太郎の家だ。広い広い庭に、遼太郎の父親自慢の桜の木がある。

「ねえ、ジュン」

遼太郎が若いなあ…。五年ほど前だろうか。

「僕達、ずっと友達だよな？」

「未来のことはわからないさ」

「何でそんなこと…」

「君はお父さんのように政治家になるんだろう？」

「…そのつもりだよ」

「そうしたら、君は遠くなる」

遼太郎が俯いた。

「僕は、何があっても君の友達でいたいよ」

何があっても、ね…。

まあ、そんなに僕のことを大切に思ってくれているというのは嬉しい。

「僕達は、今親友だ。明日喧嘩するかもしれない。けれど、今親友っていう事実があるじゃないか」

「それで十分、か…」

「少なくとも僕はね」

あの時は親友だ。

今だってそうだ。

そう、殺されている今、この瞬間だって。

あまりに無邪気な笑顔に僕は

「あ、起きたんだね」

「……？誰？」

僕が遼太郎の前で寝ていたのは、出会った時、僕の家縁側でしかない。

「僕、西条遼太郎」

「…僕は、甚雨淳之助」

これが僕らの出会い。

古い友人である僕の父を訪ね、遼太郎の父親が遼太郎を連れてやってきた。

「リョータって呼んでいい？」

「うん」

「僕はジュンって呼んでね」

「うん」

「リョータは、何して遊びたい？」

「…何でもいい」

「じゃあ、竹馬は？」

「たけうま？って何？」

遼太郎は子供らしいことが一つもなく、子供らしいことを一つも知らなかった。箱入りというには、突き放されすぎているようだった。

僕が守らなきゃいけないし、僕が教えなきゃいけない。

何故かそう思った。

遼太郎はかわいかった。

もちろん何か弱そうで小さくて放っておけない、弟のようだってだけで、他意はない。僕には。

記憶と酷似する現在で

「…ジュン？…まだ、息してるし…寝てるのかな」

「——…」

寝てないよ。

やはり声は出ない。

出会った時から、君はあまり変わってないね。

ねえ、遼太郎。

あの時、僕は本当は起きてたんだって言ったら、君はどんな顔をするのかな。

あの時と同じ、僕は細く目を開いて君を窺う。

「…ジュン、」

重なる映像。

遼太郎の顔が近付いた。

本当に綺麗な顔をしているよね、君は。

「殺したいくらいに、好きだったよ…」

重なる唇。

やはり最初の再現のようだね。

「三日前…僕に『よろしく頼む』なんて言わなかったら、君は死ななかったのにね」

僕は望んだのさ。

「…今更だけど…僕は君に生きていてほしかったな」

本当かい？

それはちょっと嬉しいな。

「聞いているの？ジュン…」

聞いているよ。

ねえ、遼太郎、泣かないで。

僕は多分、ずっと前から君に殺されたかった。

でももう、さよならだね。

「——…」

しぶとかった方だと思うよ、僕も。

「待っててね、ジュン。僕もすぐに行くから」

ああ…、もう君の言葉も聞こえないよ。

今更だけど、君と生きるのも悪くなかったかもなあ、なんて思うんだ——…。

大正哀歌

<http://p.booklog.jp/book/73633>

著者：じゅしん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jushin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73633>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73633>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ